



若い人たちに語り継ぎたい、
次の世代に残しておきたい。
貴重な話をお届けします―

あすへひとこと

「邑楽町の昔ばなし」より

十軒の石尊様祭り



十軒に古くから祀られている阿夫利神社は、神奈川県伊勢原市の大山阿夫利神社から勧請されました

邑楽町は、現在でも東毛地方で平地林の多いのが特色だが、昔は全町ほとんどが山林だったようです。したがって、低地帯ではあるが水田面積はごく少なかったようです。

そこで、昔は精根どりといって、荒地や山林を開墾して耕地にしました。開墾地が一番困るのは水利です。春先、青々として育った作物も、夏日照りが続き、雨がなければ、見るも哀れに枯死してしまいます。昔は、用水技術も施設もなく収穫は、ただただ神仏の加護に頼るばかりでした。

そこで、あちこちの村々で農業の神である神奈川県伊勢原市大山の大山阿夫利神社を勧請しました。ここ十軒でも古くから阿夫利神社をお祀りしました。十軒は鞍掛山丘陵地帯に立地していますので、干ばつに悩まされたからでしょう。阿夫利神社は別に雨降（あふり）神社と書かれるくらいでしたから、ご利益があったのでしょう。

本山の大山では、九月に明治と変わった慶應四年（一八六八）三月二八日まで、神仏習合で大山寺が阿夫利神社の別当寺（べつとうじ）でした。阿夫利神社は、仏名では石尊大権現と称されていました。したがって、農民は親しく阿夫利神社を石尊様と呼んでいた。

ました。

十軒では夏になると、鎮守の神明宮の前に灯籠を建て、回りに笹つきの真竹四本を立てて、注連をはり石尊様を祀りました。

忙しかった農作業もやっと一段落の七月二七日（本来は旧暦六月二七日）、耕地中の人たちが集まって、村中の豊作と無病息災をお祈りして石尊様のお祭りをします。子どもたちにとっては石尊様のお祭りは待ち遠しい一日でした。数珠引きをすると、紙袋に入ったお菓子がもらえるので、大喜びでした。もとは子どもたちが、桐で作った百万遍の大数珠を持つて、「ナイダー・ナイダー・ヘイ」と、珠（たま）を手おくりしながら、皆で大声を出して、各家々を回りました。

大人たちは宿に集まって手作り料理で、お神酒をご馳走になってご機嫌です。「南無阿弥陀仏・南無阿弥陀仏」の念仏が「なんまいだー・なんまいだー」になり、子どもたちにより「ナイダー・ナイダー」と変わったのです。

その後、大数珠も破損し、いつの間にかどこへしまったか、その姿を消しましたが、お神酒を頂くかたは、今でも区の大事な年中行事として続いています。

【発行】邑楽町老人クラブ連合会 【編集】あすへひとこと編集委員会
平成 10 年 12 月 31 日発行「高齢者の語り(第六集) あすへひとこと」より



夕暮れに染まる
秋の空高く
(シンボルタワー)



Photo 松村光明(記録ボランティア)

ひとりと From editors

▶ 7月から広報担当になりました。以前の職場とは全く異なる仕事内容で、右も左も分からぬままあっという間に3か月が経過しました。新しく覚えることばかりで毎日グッタリして帰宅。新入職員の頃をしみじみと思い出します。重い一眼レフカメラと毎日格闘していますが、取材先で笑顔の瞬間を撮れたときほどうれしいことはありません。まだまだ至らない点ばかりで多くの人にご迷惑をおかけしていますが、日々努力をして、早く仕事ができるように頑張っていきたいと思います。▶これから取材先で皆さんにお会いすることが多くなっていくと思います。もし広報おうらの腕章を付けた人を見かけたら、とびっきりの笑顔を見せてください。よろしくお願いします。(永倉)



この広報誌は、自然保護のため
植物油インキを使用しています。